

相談援助実習教育の効果と今後の課題

ーコンピテンシーシートによる実習生の自己評価をふまえてー

○ 関西福祉科学大学 橋本 有理子 (4381)

柿木 志津江 (関西福祉科学大学・4238)、小口 将典 (関西福祉科学大学・5253)

清原 舞 (関西福祉科学大学・5924)、中島 裕 (関西福祉科学大学・2117)

得津 慎子 (関西福祉科学大学・2035)

キーワード：相談援助実習、コンピテンシーシート、自己評価

1. 研究目的

今日の社会福祉士養成教育では、実習生が専門職として必要な能力を獲得するだけでなく、その能力を定期的に評価し、その評価をもとに自らの学びの姿勢を変えていく、主体的な学修が求められている。このような実状をふまえ、注目されるツールとして、「コンピテンシーシート」がある（橋本ら，2015）。なお、コンピテンシー（competency）は、1970年代にハーバード大学のMcClellandにより提唱された能力評価の概念である（藤田ら，2008）。一方で、実習生の学修の現状に基づいた効果的な相談援助実習教育（以下、「実習教育」とする）のあり方を検討することも重要である。

そのため、本研究では、各実習指導段階における実習生の自己評価をもとに、実習前・後指導も含む実習教育の効果と今後の課題を明らかにする。

2. 研究の視点および方法

調査方法は、大阪府内におけるA大学社会福祉学科で社会福祉援助技術現場実習指導ⅢとⅣ（以下、「実習指導Ⅲ」「実習指導Ⅳ」とする）、社会福祉援助技術演習Ⅲ（以下、「演習Ⅲ」とする）を履修している実習生を対象に、2015年4月の初回、7月の最終回、10月の初回、2016年1月の最終回の授業で集合調査法を実施した。

本研究協力への同意が得られた実習生のうち、①②それぞれにおいて、2回の調査とも同意した分析対象者数は下記のとおりである。

①実習指導Ⅲ（2015年4月）・演習Ⅲ（2016年1月）：106名

②実習指導Ⅲ（2015年7月）・実習指導Ⅳ（2015年10月）：94名

なお、A大学社会福祉学科での二年間にわたる相談援助実習及び相談援助演習の履修の流れは、以下のとおりである。

【実習前指導】実習指導Ⅰ・演習Ⅰ（4～7月）→実習指導Ⅱ・演習Ⅱ（10～1月）→
実習指導Ⅲ（4～7月）→【現場実習】（8～9月）→【実習後指導】実習指導Ⅳ・演習Ⅲ（10～1月）

本研究では、藤田ら（2008）、日本社会福祉士養成校協会（2009）、安井ら（2011）の先行研究をもとに、「基本的学習能力」「社会的能力」「価値」「知識」「技能」「実践的能力」の6カテゴリーによる77項目のコンピテンシーシートを作成し用いた（種村ら，2015）。

回答形式は、「まったくできていない（1点）」から「とてもよくできている（5点）」までの5件法で回答を求めた。

本研究では、現場実習も含む実習指導Ⅲから演習Ⅲまでの約一年間にわたる実習教育（上述の①）と、現場実習前後の実習指導Ⅲから実習指導Ⅳまでの約一ヶ月間にわたる現場実習を主とした実習教育（上述の②）の視点から、実習生の学修の現状を概観している。

3. 倫理的配慮

本研究実施にあたり、実習生に、倫理的配慮として、「本研究協力への参加は任意であり、不参加により実習生が不利益になることはない」「データは研究目的以外で使用せず、個々の回答は暗号化し、個人が特定されることはない」旨を口頭及び書面にて説明し、同意を得られた実習生に限り、研究対象とした。なお、本研究は日本社会福祉学会倫理規定を厳守し、関西福祉科学大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号 14-40）。

4. 研究結果

実習指導Ⅲ・演習Ⅲの実習生間におけるコンピテンシーの現状をデータに対応のある t 検定で分析したところ、すべてのカテゴリーで有意差が認められた。また、各カテゴリーにおける 1 項目分の上昇値として、基本的学習能力では 0.25、社会的能力では 0.19、価値では 0.23、知識では 0.60、技能では 0.32、実践的能力では 0.29 であった。

実習指導Ⅲ・Ⅳの実習生間におけるコンピテンシーの現状をデータに対応のある t 検定で分析したところ、すべてのカテゴリーで有意差が認められた。また、各カテゴリーにおける 1 項目分の上昇値として、基本的学習能力では 0.19、社会的能力では 0.21、価値では 0.40、知識では 0.36、技能では 0.30、実践的能力では 0.21 であった。

5. 考察

現場実習も含む実習指導Ⅲから演習Ⅲまでの約一年間にわたる実習教育や、現場実習前後の実習指導Ⅲから実習指導Ⅳまでの約一ヶ月間にわたる現場実習を主とした実習教育でも、すべてのカテゴリーにおいて有意差が認められたことから、国家試験指定科目の講義をはじめ、実習・演習科目（現場実習も含む）の貢献度が推察できる。

また、各カテゴリーにおける 1 項目分の上昇を見ると、約一年間にわたる実習教育では「知識」が、約一ヶ月間にわたる実習教育では「価値」が最も上昇している。現場実習という実践の場での経験をえられる機会は、「知識」を高める意欲や定着に寄与するものといえる。さらに、実践の場での経験は、「価値」の高まりに貢献しており、利用者や家族、住民、そして専門職と直接関わらせていただき、共に生活させていただく中で、実習生がその想いをうかがったり、考えたり、指導を受けたりすることを繰り返すことによって、専門職としての人間性に深く関与する能力の向上につながるものと推察できる。

一方で、実習先で学んできた「価値」を、様々な実習先や分野で学んできた実習生と共有、確認することは、「価値」を適切に定着させる上で重要であり、実習後指導での教授法を検討することが今後の課題である。

引用・参考文献

- ・藤田久美他「社会福祉教育におけるコンピテンシー評価項目の検討」山口県立大学社会福祉学部紀要 14、65-78、2008
- ・橋本有理子他「コンピテンシーにみる社会福祉士養成課程実習生の学修の現状と今後の展望—コンピテンシーシートを用いた実習生による自己評価の結果をふまえて—」関西福祉科学大学紀要 19、59-71、2015
- ・社団法人日本社会福祉士養成校協会編「相談援助実習指導・現場実習教員テキスト」中央法規出版、256-260、2009
- ・種村理太郎他「社会福祉士養成教育における実習科目と演習科目との連動を重視したコンピテンシー・モデル（福科大版）の検討」関西福祉科学大学紀要 19、13-25、2015
- ・安井理夫他「児童福祉分野のソーシャルワーカーに求められる専門性と人間性：社養協版実習指導ガイドラインの批判的検討」同朋大学論叢 95、47-64、2011

※本研究は、平成 27 年度関西福祉科学大学共同研究（一般公募）の研究成果の一部である。